森林レンジャーがゆく（121）

「巡る」

夏が終わり、草の生い茂ったハイキングコースの草を刈りながら、あきる野市と檜原村の境界にある臼杵山を目指します。「やっと色鮮やかで涼し気な秋がやってきます」と、空を見上げながら小声に出してしまいます。まだ残暑に包まれる山登りでした。遠くのぼやけた雲の少し前で、数羽のサシバらしき鷹が高き、高きへ。半日陰（はんひかげ）の木の枝先に北国から通過中のエゾビタキが止まっています。渡り鳥が時に忙しく、時にゆったりと、それぞれが少しずつ南下します。

臼杵山の山頂に辿り着く道は主に３本で、どれも長く、険しい場所もありますが、面白い山道です。山頂付近には臼杵神社が存在し、「狼信仰」との関係で、オオカミの石像があるなど、オオカミにまつわる場所となっています。秩父多摩山地には、有名な大岳山や三峰を代表にこのような神社が多いため、やはり昔はオオカミがいた、人間とオオカミの接点が多かった山地であったと思います。現在、オオカミ（ニホンオオカミ）は絶滅したとされていますので、写真の様にオオカミの石像の前に立つと、不思議さと切なさの雑感がわくのは仕方ありません。

臼杵山にあるオオカミの像は、古い像と新しい像（平成時代）があります。新しい像はオオカミらしい姿ですが、古い像はオオカミの姿からかけ離れているように感じます。どちらかと言えばと、バランス的には子グマの姿に似ていると思います。昔の人が見ていたのは、本当にオオカミだったのかと疑ってしまう石像です。

この山地では「ニホンジカ」や「ニホンカモシカ」が多く生息しており、その影響もあってか10年以上前の森とは様子が変わってきている印象を受けます。ニホンジカは農林業に被害を及ぼす狩猟対処種ですが、奈良公園のシカは天然記念物として保護されています。また、ニホンカモシカは天然記念物のため保護の対象ですが、近年は個体数が大幅に増加し、農林業にも影響が出ています。このような現状にはギャップが感じられ、これまでの人間の行いの結果として自然のバランスが崩れている以上、自然保護の在り方も見直すべき時代になっているかも知れません。

昔の自然などの話には大変興味ありますが、やはり現在のように正確な情報は少なく、現在と１００年前の自然を比較することは困難です。だからこそ、１００年後、２００年後、さらに先に生きる正確な情報は必ず必要になると思います。そして、どんな時代になっても、ニホンオオカミのように人間が生物を絶滅させてしまうという取り返しのつかないエピソードを歴史に残さないことを毎回この臼杵山頂で祈っています。（パブロ）